
霧を背負いゆく者

星塚夜光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧を背負いゆく者

【Nコード】

N5612J

【作者名】

星塚夜光

【あらすじ】

名高い貴族から自らの精神世界に突如現れた霧という名の殺人鬼によって凡人に突き落とされたセーシャが、一生を霧とともに行く覚悟を決め、それとともに歩んでいく悲しい殺戮の物語

彼は背負う者（前書き）

はじめましてです。星塚です。

そんなに頻繁に投稿できないと思うのですがっ

よろしくお願いします

そして、あのお：フィクションが好きではない人は吐き気がするかもしれないので

今のうちに逃げといった方が良いかと。

OKな方はどうぞお楽しみください

彼は背負う者

主要登場人物

セーシャルフォンヴァルストリウム（18）♂：ヴォストリウム家の第一子。剣術に優れ、

彼の魔術は、魔導師並だと有名。

霧（？）？：セーシャの精神世界に出現する。何者かは一切不明。何をしたいのかもわからない。気まぐれ。ただ、その力だけは、神にも匹敵する。すさまじい食欲の持ち主。

カナンⅡフォンⅡステルフェス（12）♀：男を装い国を統べる若きステルフェス帝国第18代皇帝。セーシ

ャに一目惚れする。だが、セーシャの中の霧を見て…。

故 ステファニーⅡシルフニウス（10）♀：セーシャの恋人。霧によって殺される。すばらしい魔導師だった。

プロローグ 彼は背負う者

「貴様は誰だ」

俺は頭の中の霞に思わず呼びかけていた

「貴様はいったい誰なんだ？」

——私は霧——

「霧？馬鹿げた事をほづくな。霧が会話をするはずないだろ…」

そういいながらも俺は霧の存在を信じずにはいられない

——ほう…一応私の存在を心の底では信じているようだな。しかし…私のことを信じているとは言えな　　いだろうな…その態度では——

「当たり前だ。存在は信じられても、貴様の事を信じることのできる要素がまだなさすぎるだろう」

俺は心なしか声が震えているのを感じた。

（柄にもなくびびってんのか…らしくねえなあ…俺）

——体は感じているのだろうか、私の存在の大きさを——

霧の声に少し安心してしまっている自分に俺は失望という名の悪意さえ感じていた

「…貴様は、誰の許しも得ず…俺の許しも得ず、人の精神の中に入ってきて何をしたいんだ…」

——いや…入ってきたのではない。元々ここにいたんだ——

「……………どういう……ことだ……」

——どういふこと？ 簡単ではないか。

お前は私であり、私はお前であるということだ

< 続 >

彼は背負う者（後書き）

えー…えっと

続きも読んでくださるという方…ありがとうございますっ！

頑張って書きますからあっ！

第一章 霧の暴走（前書き）

ああ…：記念すべき第一章ですが

早くも波乱の予感です（苦笑）

でわでわ、どうぞ…！！

第一章 霧の暴走

俺、セーシャが霧の存在に気づいてからちょうど丸一週間立った頃その事件は起こった――。

朝、俺は不快な金属音で目を覚ました。そして、その犯人に気付く。

「またお前か。霧」

――またとはなんだ。私がセーシャモーニングコール大作戦♪をはじめたのはほんの一週間前だぞ！――

そう。こいつは出会ったときからこの嫌がらせを始めたのだ。全く悪趣味なやつだとつくづく思う

――嫌がらせではないぞ、セーシャモーニングコール大作戦♪だ！――

またこれだ。こいつは、俺の思っていることが分かる。同時に俺もこいつの思っていることが分かる。はずなのだが…。

「どうして俺にはお前の思っていることが分からないんだー！！」

――それは仕方のないことだ。なぜなら、私はお前より強いからな

――そんなことは俺が一番自覚している。霧は俺より強い。いや、俺が

今まで出会ってきた人物の中で一番強いと言えるだろう。

「その精神のミストを、どうしたらはがせるのか、早く教えてくれ！」

自らの本音をこうやって素直に話すことができるのは、やはりこの霧という得体の知れない存在だけなのだと思うと、我ながら情けない気持ちになる

——私に血飛沫ちしぶきを浴びせてくれたら、教えないこともないぞ——

「…………ふざけるな」

そういつて霧との会話を断ち切ると俺は立ち上がって食堂へと足を運んだ

「珍しいですね、貴方が食堂でお食事を取るだなんて」

右腕をつっている兵士が俺に声をかけた

「たまには、な」

俺は曖昧な笑みを浮かべて、黙々と食事を取り続けた

そして満腹になり、満足したとき————

——霧の声がした

——私は食後の運動をさせてもらう——

「ちょっ…どういことだッ!？」

気付いた頃にはもう遅かった…

俺は体の自由を霧に奪われたのだ

霧はそこにいた兵士の鮮血を帯びた俺の神剣、セフェリールを振りかざし、人間とは思えない手さばきで、人という人を殺しまくった。

そしてついには、城にいた者全員を…殺した。

霧は、血まみれの剣を片手に、死体の山の頂点に君臨し、神々しいばかりの金髪をかきあげ、声を上げて笑っていた

俺が声をあげて泣き喚いていることも知らずに……………

――人は目にして初めて

本物の恐怖を知る――

(続)

第一章 霧の暴走（後書き）

さあさあ、霧の本性が現れました

ここからセーシャの運命が大きく変わっていくのです！（笑）

第二章 霧とセーシャ（前書き）

もう、どんどんセーシャの人生は泥沼行きです
どうか作者とともに

かわいそうな少年を見守ってやってください

第二章 霧とセーシャ

俺が体の自由を取り戻したのは、死体の山が積み重なり、その頂点で霧が高笑いをした直後だった

「俺に何をした」俺は自分が冷静でいられることに驚いていた。どうして自分がこいつを殺したい衝動を抑えられるのか：無論、自分を殺すことになるからなんだろうが：

——何をしただと？人殺しに決まっているだろう——

当たり前のことを言っているようにいう霧を消し去る方法があるならば、俺はそれが死神などの類に魂たましいを売ることになったとしても喜んでいただろう

「お前はいったい何者なんだ——っ！」

——いまさらそんなことを聞くのか？お前は私であり、私はお前であると言っただろう。それで納得していたではないか——

「そんな言葉で納得する馬鹿がどこにいるというのだ！ふざけるな。真面目に質問に答えろといっているのだ！」

俺は心なしか声が荒げていくのが分かった

——取り乱すな、セーシャ。私はお前の負の念が生み出したもの。元々お前が持っている本能のようなものなのだ。お前が真剣に剣の

稽古に励んでいれば私など、当に超えられたものを。お前が自らの身分を憎み、父を憎み、自分の血筋を憎んだために、私はその本能に従わなければいけなかったのではないか。――

「…っ！」

確かにそうだった。

俺は自分が嫌いで、親が嫌いで、家が嫌いで、自分の周りの何もかもが嫌いだった

霧が現れてからそんなことを考える暇もなく、忘れていた感情それが霧にはいつだって洩れていたのだろう

その感情が彼を殺人衝動へ導いてしまったのだとしたら

それは俺の責任だ

そう思うと胸が軽くなった

あれは俺の本能であり、俺の意志でやったことだとしたら。それなら納得がいった

父上を殺したのも、兵士達を皆殺しにしたのも、城を壊滅状態へと追い込んだのも

全部全部、俺がやったんだ

霧のせいではない、霧の意志ではない、セーシャという名の男の感情がそれをさせたというのなら

俺は殺人鬼として生きていくだけだ

そう思っていた

霧に親近感さえわいていたのだ
そのときの俺は

憎しみもせず、ただただ
己の意志で何かをしたという、達成感だけが
心の中に宿っていた

自分が殺しに楽しんでいるその心こそが

霧を生み

自分には全く宿っていなかった感情をでっち上げ、

さらにはこれから愛する人たちを殺していく

憎むべき存在をいくつも作り出してしまった自分の

最も憎むセーシャを、自分を、作り出してしまうことに

全く気付くことはできなかったのだ

それはまるで霧のように

白く人の心をにがらせ、深いところまで引きずり込んでゆく

——まだ気付けないのかと本物の彼は

心の中で叫んでいるのに――

(続)

第二章 霧とセーシャ（後書き）

あいもかわらず駄文ですいません

また、感想等いただけると嬉しいです

思い出（前書き）

お久しぶりです

成績が真剣にやばくて慌てて勉強してまして（汗）

よければどうぞです

思い出

それからしばらくたった日　　いつかは変わってしまうものに気付いた

あの死骸の山があった場所も　　いつのまにか広い荒野にかわっていた

――どうした？――

霧がいつの間にか心の閉鎖を覚えていたセーシャに語りかけてくる

「いや、変わり行くものの偉大さを、な」

――おかしな奴だ。変わってしまうものを偉大と呼ぶなどと――

「お前に可笑しいといわれてしまうと、私は世界一不幸せになってしまうぞ」

――生意気な口を利くようになってしまったな――

「ああ、あれから一ヶ月もたつのか」

今まではこの霧という存在を信じてなどいなかったし

気味が悪いとさえ思っていたのだから

こんなに打ち解けて話をする日が来るなどとは一度も思ったことなどなかったのだ

いつの間にか友とさえ思えてきたその存在に今はもう慣れてしまっていた

「友……か……………」

——どうした？セーシャよ——

「否、昔のことだ」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

5年前：俺にも友と呼べるものがいた

「セーシャ陛下、お会いできて光栄です」

そう言い俺の前に現れた人物、それがスカア＝アルベルトだった

「貴方の方が地位は上だろう？スカア陛下」

初対面の第一印象は、謙遜心の高いとてもいい奴だった

「では、セーシャ閣下。とても言おうか？」

「フツ…セーシャ。とお呼び下さい、陛下」

スカアとセーシャは他の誰にも見せない柔らかい微笑みを互いに向けて

いつの間にか誰よりも親しい仲となっていた

といっても、セーシャは小国の領主でスカアは大国の次期国王だ
身分が違いすぎる…

誰もがそう思い、二人の行く先を案じていた

そして、事件は起こった

セーシャの父親が国家に反乱を起こしたのだ

二人の友情が壊れる原因となったのはそれ以外の何者でもなかった

「なぜ父上を…僕を裏切ったんだ！セーシャっ！」

反乱が起きて、スカアの父、現王が殺されたのだ

彼の怒りもセーシャには痛いほどわかった

「俺は君を裏切りたくなかったのだ…。それだけは信じてくれ！スカア…」

自分にはどうすることもできなかったのだ

自分は無力で、父上に意見することさえ許されないのだから

「…僕らを仲違いさせるために、君の父が僕の国に反乱を起こした
…そうとしか考えられないな」

二人きりであることを確認し終えたのか、スカアの声は優しくなっ

ていた

「スカア：俺はどんな言葉を言ったところで、言い訳にしかならないと思ってる。本当にすまなかった俺にもっと力があれば、君の父上は……」

「もう何も言うな、セーシャ。君のせいではない事は分かっている。これから君を責めたりはしないよ。でも、僕らの仲が良いから襲われたのだとしたら、これからも続いてしまうかもしれない……」

「わかってる。俺も同じことを考えていたんだ。もう、俺たちの仲が悪くなったと。君が俺のことを毛嫌いし、これ以上手を組んでいくつもりはないと公言でもしなければ、父上は君の国に反乱を起こすことをやめたりはしないだろう。スカア、つらいが……」

「思っていることは一緒だよ、セーシャ。僕も最愛の友として君と離れ離れになってしまうのはとても辛い。だが……君も分かっているだろう？ もう……これしか……」

二人の間にしばしの沈黙があった。互いを誰よりも思っているからこそ、そのつらさがその身を、心を、切り裂くようにする

「ああ、これしかないんだ」

セーシャはつらかった。誰よりも自分を愛してくれた友と、大切な人とまた離れてしまうときが来るだなんて――。

「セーシャ……。僕はずっと君を……」「セーシャ、大声を出して、何事だ」

スカアの言葉を遮るようにして現れたのは、他でもない父だった

「父上……」

「これはこれは、スカア新陛下もご一緒でしたか」

皮肉めいた口調で言う父に、初めての怒りの感情が浮かんだ

「やあ、小国レリルの領主殿。人殺しの後の気分はいかほどか？」

スカアはありったけの憎しみを込め、彼を睨みつけていた

「人殺し？滅相もございません。私はただこの国を変えようと思っただけです」

『私の手でね』そうつけくわえて笑う父にセーシャはこぶしを握り締めてうつむくことしかできなかった

「変える、か。ずいぶんとたいそうな理由をつけるのだな。まあいい。今回はコレだけで済んだのだ。咎めはしないが、次はないと思え。わが軍は常にお前を見ているぞ」

ギッとセーシャと父に冷たい視線を向け、スカアは立ち去っていった。それが、セーシャがスカアを見た最後だったのだ――。

☆

☆

☆

☆

☆

「スカア……」

そつとその名を口にする

言ってしまうばすぐに忘れそうになる儚い名前を声にのせた

彼に会いたい：不意にそう思ったのだ

自分の目で確かめたいのだ、自分達の友情が永久である事を

自分も人と繋がっているという確証が欲しい

自分と霧とはどのくらいの距離にあるのだろうか？

スカアとの距離よりは長いだろうが、それでもやはり近いことに変わりはない

自分が友と思えるものと一緒にいられる幸せをかみ締めていこう

そうしてセーシャはまた歩くのだ

間違った道にずるずると……

——— 彼の名はセーシャ

砂漠で迷った旅人のよう———

思い出（後書き）

ありがとうございました！

よければ感想等としどしお願いします（ダメダシとかもお願いします）

次はたぶん二人が再会しますね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5612j/>

霧を背負いゆく者

2010年10月9日07時08分発行